

原文

宇治拾遺物語「尼、地蔵を見奉る事」

今は昔、丹後国に老尼ありけり。地蔵菩薩は暁ごとくにありき給ふといふことをほのかに聞きて、暁ごとに地蔵見奉らんとて、ひと世界惑ひありくに、博打の打ちほうけてあたるが見て、「尼君は寒きに何わざし給ふぞ」と言へば、「地蔵菩薩の暁にありき給ふなるに、会ひ参らせんとて、かくありくなり」と言へば、「地蔵のありかせ給ふ道は我こそ知りたれ。いざ給へ。会はせ参らせん」と言へば、「あはれ、うれしき事かな。地蔵のありかせ給はん所へ、我をみておはせよ」と言へば、「我に物をえさせ給へ。やがてみて奉らん」と言ひければ、「この着たる衣、奉らん」と言へば、「さは、いざ給へ」とて隣なる所へゐて行く。尼、喜びていそぎ行くに、その子に地蔵といふ童ありけるを、それが親を知りたりけるによりて、「地蔵は」と問ひければ、親、「遊びに往ぬ。今来なん」と言へば、「くは、ここなり。地蔵のおはします所は」と言へば、尼、うれしくてつむぎの衣を脱ぎて取らすれば、博打はいそぎて取りて往ぬ。尼は、地蔵見参らせんとてゐたれば、親どもは心得ず、などこの童を見んと思ふらんと思ふほどに、十ばかりなる童の来たるを、「くは、地蔵よ」と言へば、尼、見るままに是非も知らず、臥しまろびて、拝み入りて土にうつぶしたり。童、すはゑを持って遊びけるままに來たりけるが、そのすはゑして手すさみのやうに額をかけば、額より顔の上まで裂けぬ。裂けたる中よりえも言はずめでたき地蔵の御顔、見え給ふ。尼、拝み入りてうち見上げたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して、拝み入り参らせて、やがて極樂へ参りにけり。されば、心にだにも深く念じつれば、仏も見え給ふなりけりと信ずべし。

口語訳

宇治拾遺物語「尼、地蔵を見奉る事」

今は昔、丹後の国に年老いた尼がいた。地蔵菩薩は夜明け前に歩きなされるということ（老尼は）ちらつと聞いて、『夜明け前に地蔵を見申し上げよう』と思つて、辺り一帯をさまよい歩いていると、博打打ちで（博打を）打つのに夢中になっている者が見て、「尼君はこの寒いのに何をしていらつしやるのか」と言うので、「地蔵菩薩が夜明け前に歩きなされるそうなので、（私は）お会い申し上げようと思つて、このように歩き回っているのだ」と（老尼が）言うので、「地蔵が歩きなされる道は私が知っている。さあいらつしやい。（私が）会わせ申し上げよう」と（博打打ちが）言うので、「ああ、うれしいことだなあ。地蔵が歩きなされる場所へ、私を連れて行ってください」と（老尼が）言うので「私に物をお与え下さい。すぐに連れて行って差し上げましょう」と（博打打ちが）言うので、「この（私が）着ている着物を、差し上げましょう」と（尼さんが）言うので、（博打打ちが）「さあ、いらつしやい」と言つて隣の家に連れて行く。尼は、喜んで急いで行くと、その子どもにも地蔵という（名前の）子どもがいたのを、（博打打ちが）その子の親を知っていたので、「地蔵は（どこに）いるのか」と（親に）問うと、（親が）「（地蔵は）遊びに行っている。じきに帰ってくるだろう」と言うので、（博打打ちが）「さあ、ここだ。地蔵のいらつしやる所は」と言うので、尼は、嬉しくなつて袖の着物を脱いで取らせると、博打打ちは急いで受け取つて去つてしまった。尼が『地蔵を拝み申し上げよう』と思つて座っているの、親たちは納得がいかなず、『（尼は）なせうちの子を見ようと思つたのだろうか』と思ううちに、十歳ほどの子どもがやつて來たのを、親が「おい、地蔵だよ」と言うので、尼は、それを見るや否や夢中になつて、転がるようにひれ伏して、拝みこんで地面にうつ伏した。子どもは、木の小枝を持って遊んだまま來たが、その小枝で手遊びのように額をひつかくと、額から顔の上まで裂けてしまった。裂けた中から、言いようもなく素晴らしい地蔵のお顔が、見えなされる。尼は、拝みながら仰ぎ見ると、このように地蔵菩薩が立ちなさつていたので、（尼は）涙を流して、拝み申し上げて、そのまま極樂往生した。だから、心にさえ強く念じれば、仏もお見えになつたのだと信じるべきだ。